

現代におけるガンジーの教育思想の重要性について

V・N・ラジャシエーカラン・ピライ
渡辺輝明 訳

日印共同シンポジウムの進行役を務められるラダククリシュナン博士、ならびに尊敬するパネリストの皆様、そして参加者の皆様、このたびは、このようなすばらしい機会にご招待いただきありがとうございます。

私はこれまでに、教師、研究者、事務担当官として大学教育に従事してきましたが、本日は、そのような経験をふまえて、「教育とガンジー主義」をテーマに講演させていただきます。本日このように、東洋哲学研究所と国立ガンジー博物館、そしてインド創価学会による、ガンジー主義と仏教に関する現代的思想をテーマ

に掲げたシンポジウムに参加させていただいたことは、私の最大のよろこびであります。

一 教育の目的

私は、過去三十年以上にわたって大学組織に関わってきました。カレッジや総合大学で学ぶ皆さんの学部生と交流してきましたし、副学長として講演するために大学やカレッジに足を運びました。この大学という組織は、教育の目的という観点から、これまで何度も批判されてきました。社会における教育の目的とは

何でしょうか。さきほどラダクリシュナン博士は、サイバー時代におけるガンジー主義と仏教との関連性について講演されました。彼の講演原稿にも目を通してあります。また私はこれまで、何度も教育における人間性の喪失、または疎外について語ってきました。子どもたちや村落出身の学生たちに、さまざまな具体例を用いて、制度としてすでに確立している現行の教育における、人間性の喪失についての見解を語ってきました。

そのなかで私がしばしば用いた例は、ある兄弟についての話です。兄は高等教育を受けていますが、弟はほぼ無学という兄弟です。ここで何か不幸な事件、例えば火災やバスの衝突事故などが、教育を受けていない弟と、大変に教養の優れた教育を受けた兄の身近で起きたとしましょう。弟は、この事故を耳にしたと同時に現場へ駆けつけ、適切な行動をとりました。兄のほうは、しばらく考えた後、その場には行かないことになりました。弟は現場で被害者を救いました。しかし兄のほうは、翌日に起こるであろうことが頭に浮かび、

その時に弔電を打つかもしれないし、さらに考えをめぐらせて、翌日の新聞に弔電を載せればよいと思いつくでしょう。これが、私たちが今日受けている教育というもののなのです。

ここでは、インド特有の事情をふまえた上で教育に対するガンジーの考えに焦点を当て、仏教の視点についてのいくつかの見解を述べることにします。ここで見られた、現在の教育がもつ人間性の喪失あるいは疎外という問題は、結論からいえば、私たちがガンジーの教育観を理解していないことに起因しています。ラダクリシュナン博士も言及しているように、教育を受けた若者たちの間に見られる緊張感とは、現在行われている教育と、科学技術の進歩にその端を発しています。それは科学が過剰に普及したためではなく、おそらくは、あらゆる分野で見受けられる緊張感の原因となっている、科学と技術に対する誤解のためでしょう。

これまで私たちは、ユネスコが発表した教育に関する報告書に目を通してきましたが、この報告書は、教育を受けた個人にもたらされる、さまざまな形で現れ

る格差を特に重視しています。伝統と近代との溝は大変重要な格差です。伝統と近代との乖離は決して新しい問題ではありません。それは産業革命の時から存在した問題です。また、物質主義と精神性との乖離は、科学と宗教との溝として位置づけることができます。

さらに、開発がもたらす格差があります。これは、例えば長期的視野と短期的視野としての開発に関する問題として捉えることができるでしょう。ある見方によれば、科学と技術は、すばやくそして自然に諸問題を解決できると考えられています。もちろん私たちは、そうしたすばやい短期的な解決法に頼ろうとしますが、それらは開発に対する長期的な展望を欠き、当然のことながら、環境や生態系などにおける諸問題を引き起こす原因となっているのです。

仮に、近代の教育がこうした多様な格差を引き起こしているというならば、それは調整される必要がありますが、これはまさに教育のあり方に帰結する問題なのです。教育の目的を問うとき、あるいは教育を定義するとき、私はマハトマ・ガンジーが数十年前に言及

していたところの、子どもたち、あるいは若者に目を向けることにしています。ここでガンジーが述べている、「人生のための教育、人生から学ぶ教育、そして生涯にわたる教育」に少々言及したいと思います。

二 ガンジーの教育観

私はケララ州の大学で働き、キャンパスで起こる騒動にも遭遇してきました。私たちは、教育と人生をたて分けて考えてきたのです。だれもが教育の目的に疑問をもっています。人生のための教育とは、人生に意義をもたらし教育です。しかし人生から学ぶ教育は、まったくといってよいほど見受けられません。教育は、私たちがいうところの、講義室と実験室からのみ学ぶことができるかとされています。当然のことですが、私たちは、人工的な手段によってこの種の教育を補完することを試みてはいます。しかし、生涯にわたる教育という観点から見ると、ある資格を得たり学位を取得したりすると同時に、すべての教育が終わったものと考え、学習から遠ざかっていくのです。今日において

は、さまざまな形の教育を見ることが出来ます。そしてそれぞれにどのような形容をしようとも、どれも意味合いの異なるものです。このマハトマ・ガンジーによる教育の定義には、教育という枠組みのもとに把握されるすべてのものが含まれます。「人生のための教育、人生から学ぶ教育、そして生涯にわたる教育」でいうところの人生が、教育から引き離されているということが、まさに人間性の喪失あるいは疎外の温床になっているのです。

これまで私は、大学のキャンパスから人生という視点が抜け落ちており、またそれが、物理的な衝突を学生の中に招く原因であると語ってきました。だからこそ私たちが、人生の存在に教育の枠組みとしての意義づけを行えば、ガンジーの教育観は完全なものとなり、また、今世紀における教育開発のあらゆる側面を促進するための起動力となるでしょう。私は、彼の教育観について、また、その視点が社会あるいはそれぞれの国に対してどのような意味をもつかということについて、考えを語ってきました。

社会変革を起こすことは本当に大きな課題であり、特に深刻な所得格差が存在し、無知と識字率の低さがエリートと大衆との溝を拡大している国にとっては、重要な問題です。インドのように、開発のための計画的アプローチを採用している発展途上社会では、教育は社会経済的な移行をもたらすための重要な要素の一つです。これがすなわち、一九六四年から六六年にわたる有名な教育諮問委員会である、ラダクリシュナン・コミッションが提示したところの、「大規模な変革を達成するための、唯一効果的な方法は教育であり、教育こそ、社会制度とサブ・システムに変化をもたらし、現状に影響を与えるものである」という見解が意味するものなのです。

三 ガンジーの教育事業

ガンジーの建設プログラムのなかで最も重要な位置を占めていたのは、「ナイ・タリム」と呼ばれる新しい教育制度の確立でした。アチャリヤ・クリパリニによると、この新教育は、ガンジーの社会的、政治的な

体系の礎石でした。ガンジーは、彼が指導した教育計画事業は静かなる社会革命の最先端であり、都市と農村に健全な関係を提供し、社会に存在する階級間の毒された関係を撲滅すると考えていました。この教育に関する位置づけは、他の学者や思想家たちによっても確認されてきたことです。

ザキール・フセインは、かつてガンジーの教育観に関する見解を以下のように述べています。「社会状況に配慮した実践的で生産的な機能を教育に吹き込んだものである」と。インドのすべての子どもたちは、肉体力労働者と知識階層およびエリート層との間にはびこる偏見を崩壊させる方向に向かうでしょう。これが、新教育というガンジーの概念がもつ社会的な意義なのです。しかしそれは、教育の個人的目標や、社会的目標を犠牲にするものではありません。ガンジーは、「教育によって私が意味するのは、子どもや大人の、肉体的、思想的、精神的な意味において最善のものを引き出すことなのです」と語っています。この教育観は、それら二つの目的を達成させるものなのです。

ガンジーの教育観が果たす役割とは、第一には七歳から十四歳までの子どもたちのための教育であり、基礎教育と呼ばれています。これは、のちにあらゆる段階へと拡大していきます。ガンジーは、その教育は大学の期間を含めた、人生のあらゆる段階の教育を含むべきだと考えていました。サルボダヤ（万人の幸福）の思想家たちは、こうした社会的、個人的な目的を含んだガンジーの新教育観が強調している考えを、全面的に受けいれました。

ガンジーは、私たちの将来をひらくために、私たちのニーズや特質、そして熱望に見合った国家教育事業計画の基礎を築きました。その彼の事業を完結させ、教育に関わるすべての分野に拡大させるのが私たちの役目なのです。その過程において、彼の教育観を採用しそれを適用しなければならぬのは当然として、個人と社会に関するガンジー思想全般に見られる精神性のなかで引き継いでいかなければなりません。ガンジーの教育観にどんな利点や弱点があろうとも、私たちが忘れてはいけぬのは、彼が意味したところの教育、

すなわち子どもたちを勇気づける教育です。それは、人格の純粹さと非利己主義的な奉仕に依拠する新しい思考に支えられたものであり、真理と愛に淵源を求める社会の建設に帰結するものです。これはまさに、仏教が提示する概念です。

基礎教育は、新しい枠組みと新しいアプローチを象徴しています。世界で起きているすべての争いの源泉は、知識が労働から引き離されていることにあるのです。誤った心理学によって思想が分断され、誤った社会学によって人生が分断され、誤った経済学によって異なった市場価値が割り当てられています。教育の重要な原則の一つは、この労働と知識が、常に関連づけられなければならないということなのです。労働から離れた学習は、社会的な不正につながるものです。ダイナミックな動きのある社会においては、教育は、個人に技術と態度を身につけさせるものでなければなりません。これらは、変化する状況に適応するため、そして社会変革のための行動に建設的に参加するためのものです。そしてこのような成果は、適切な教育制度

を採用することによってのみ得られるのです。

ガンジーは、教育は人間の経験と密接に関連したものであるべきだと信じていました。「人間性を説く書籍に勝る書籍は他にあらうか」と彼は質問を提起しました。国家全土において思想と行動が一致すること、それが彼のアプローチの重要な視点であり、これを英国植民地制度によって導入された制度にかわるものとして提示したかったのです。そして、教育制度は思想と精神の高度な発達を可能にし、勇気と自尊心を人々に植えつけるものである一方で、知識、科学、道徳、倫理が最高の極みに到達するよう援助するものであると強調しました。ガンジーが目指したのは、「社会的意識をもった人間が真理と非暴力に献身する社会」を發展させることでした。彼の教育事業計画は、国内的な視野で見れば国家主義的であり、その性格としては理想主義的であり、目的としては実用的かつ社会的である一方、精神的な面での意図も含んでいました。また、彼の夢であるサルボダヤ運動を具体化させる基本的な手段でもありました。そこでは、国民の間に浸透する

階級間および地理的な格差が最小限に縮小されるのです。

ガンジーは、伝統的な社会制度や小規模産業に混乱が生じたことに起因する、国内の貧困、無知、後進性、不満、退廃といった状況をふまえて、基礎教育の事業計画を明確にしました。先ほども触れましたように、彼は、「大人と子どものもつ最善のものを引き出さなければならぬ」といったのです。この急進的な事業計画は、村の退廃が進展するのを抑止し、村の経済を再生させ、適正な社会秩序の基礎の建設を促進したのです。そこでは、「もてる者」と「もたざる者」との自然な境界は見られず、誰もが受け入れられる生活水準を維持することが保障されたのです。農村と都市との格差を是正し、社会に見られる構造的、社会経済的な不均衡を正すことを目指したガンジーの計画にとって、教育事業計画は欠かすことのできない要素でした。

ガンジーは無償教育についても言及しています。無償教育という言葉によってガンジーが意味したのは、州政府あるいは他の機関が全額負担し補助金を支給す

るという意味でのものではなく、教育手段と学習材料との両方を備えている庶民の労働経験から学んで、自身の自立または自活を最大限に可能にするという制度を示唆していました。ガンジー流の制度は、別な意味でも無償でした。それは、基本的に正式なフルタイムの学校教育を意味していたわけではありません。彼は、中等および高等教育について、非常に特徴のある考えをもっていました。つまりガンジーは、研究や高等教育に反対していたと考えられています。彼は研究、高等教育、そして知識の形成に関して大変明確に述べています。ガンジーの事業計画における高等教育は、訓練機会を提供する基本的な機能を持ち、国家開発のための人的資源として、適切な動機づけを行うものでした。

私は、ここである引用を用いて講演を終わりたいと思います。「私の事業計画のもとに、多くのすばらしい図書館や研究機関が建設されれば、科学者やエンジニア、そしてその他の専門家たちが、国家の真の奉仕者として、自身の権利と要求を意識しはじめたわが国の

非暴力と日本仏教

宮田幸一

非暴力の教えと日本仏教との関係を論じるにあたって、非暴力のいくつかのレベルを区別する必要がある。個人的次元では、僧尼などのように暴力を使用せず、不殺生戒を守ることができる人もいる。しかし社会的国内次元では、治安維持のために警察官が犯罪者に対して暴力を使用することは容認されている。さらに国際的次元では、外国からの攻撃に対して国家を守るために軍人が暴力を使用することはやむをえないだろう。極端な平和主義者は絶対的非暴力を主張し、いかなる次元での暴力にも反対する。しかし多くの平和主義

者は条件付きの平和主義者であり、いくつかの次元で暴力の使用を容認していると思う。最初に、私は非暴力の教えと日本仏教との歴史的関係を考察する。ついで、日本仏教が非暴力を促進するために解決しなければならぬ、いくつかの問題を指摘したい。

一 聖徳太子の和の思想

日本人が持っていた呪術的宗教観を超えて、初めて仏教の普遍的思想に着目した人が聖徳太子であった。聖徳太子の十七条憲法で最も強調されているのは、「和」